

広報課便り



先日、「本の探偵」としてご活躍の赤木さん先生にお会いしました。先生は、子どもの本の与え方などについて日ごろから講演され、『ねえこの本読んで！だいたいのまき』（リブリオ出版）など著書も多数あります。ご自宅近くの小学校の図書室で、ボランティア活動をしているところにおじゃましました。

一歩入ると、そこは私の思い描いていた「学校の図書室」ではなく、明るく楽しそうなお部屋です。以前掃除用具が入っていた場所は、小物でディスプレイされ本の紹介コーナーになっています。柱には、天井から床まで冬のイメージの布が掛けてあります。部屋の中を見回すと、一人寝そべって漫画を読んでいる子あり、二・三人で読み合いをする子あり、調べ物をしている様子の子あり。終業のベルが鳴ると、一人の子がそっと本を隠して行きました。だれにも借りられないようにしておいて、後でゆっくり読みたいのだそうです。

赤木先生は、「親は子どもがほしいといった本を全部買ってやりなさい。」「大人が子どもに読ませたいと思う本を押し付けてはいないか？」「子どもが読みたいと思うものがいつでも読めるという安心感を保障してやるのがまず第一。」「とおっしゃいます。そうして書架を眺めてみると、「ちょう虫」「ファンタジー」「SF」などの分類が目飛び込んできます。シールには、日本十進分類法の番号ではなく、蝶や虫の絵が貼ってあるのです。全集や伝記はまとめて置くばか

りでなく、例えばヘレンケラーは福祉関係の書架へ置くなど、並べ方一つとっても子どもが本を手にとって読みたくなるような工夫がいっぱいです。赤木先生が取り組まれてから、子どもたちの読書量は五倍にもなったそうです。

伊藤亜矢子先生は、「ミニ心理学」のなかで、「選ぶ」ためには、「迷う力」が大切とおっしゃっていますが、それは人間としてたいへんな能力であることを大人が知り、その上で、ゆつたりと「迷う」時間や、「選ぶ」自由を保障するということが大切だということでしょうか。

今回の特集「自分で選んで」は、初めは難しいことではないかと考えました。けれども、有村先生が述べておられるように、「何と今までの学習が制約の多いものであったか。」と大人がまず解放され、ゆつたりと子どもの「選ぶ」活動を見守るようになれば、子どもたちは生き生きと、楽しく、しかも充実した活動ができるのだなと納得しました。

